

沼倉 大樹(1502051)

<序論> 研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールにおいて、ポジションにおける役割というものは重要な位置を占めていると考える。多くのポジションがある中でも、フローターは筆者が最も多く関わっており、プレーし続けたいと考えるポジションでもある。しかし、ハンドボールを始めて10年目になった今でさえ、フローターの個人戦術についての理解を深め、学びたいと考える。さらに、その結果を今後筆者がハンドボールと関わっていく上での手立てとしたい。ハンドボールにおける個人戦術はシュートを決めるための手立ての一つであり、得点を競うハンドボールでは、不可欠なものである。シュートを決めるための位置どり、走り込みは個人戦術と言える。フローターの役割はロングシュートにあると考え、シュート到達までの走り込みとそのための位置どりについて研究していく。

本研究の目的はフローター個人戦術の一つである位置どりを中心にそれに関連する動作についてそれぞれを類型化し、その構造を明確にすることを目的とする。その方法としては、K・マイネルの運動学における自分自身の運動を知覚する自己観察と他者の知覚に基づく他者観察によるモルフォロギー的考察法を用いることにしたい。その対象をアテネオリンピック(2004)のドイツ代表のダニエル・ステファン選手とする。またその際、関連文献の分析・考察をする。

<本論>

第一章 ハンドボール競技の構造特性

ボールゲームに基づきハンドボールを考察したり、ハンドボールのゲームの特性を把握したりすることにより、ハンドボールをより深く考え、理解することができる。ここでは、ハンドボールの特性に触れ、個人戦術からグループ戦術、さらにはチーム戦術についてまとめた。このことでグループ戦術やチーム戦術を成り立たせているのが、各プレイヤーの個人戦術であることがわかる。オフェンス局面における個人戦術は、パスやシュートといった基礎技術をゲームの流れやディフェンスの状況などに応じて使い分けることであり、ゲームを行う際には個人戦術が前提となっている。相手のディフェンスの間をついたプレーや相手の判断を遅らせるプレーなど様々な個人戦術が考えられる。ハンドボールのゲームではプレイヤーがボールを保持していない時間がほとんどを占めており、さらにはほとんどすべてのゲーム行為は相手の妨害の下で実行されるので、そのような状況における動き方がとても重要になっている。個人戦術としての基盤となるものがしっかりとなくては、集団戦術を成立させるのは難しくなる。

第二章 ゲームの運動観察方法

個人戦術の運動観察のためには、K・マイネルの運動モルフォロギー的考察法を用いる。この考察法では、あるスポーツ運動を外から知覚するだけでなく、中から知覚する他者観察の自己観

察化が求められる。この観察は、運動観察や運動共感に習熟していること運動経験、ならびに観察のスピードと多面性に左右される。このようにして観察した運動を本質的なものにするため、K・マイネルの諸カテゴリーを用いる。このカテゴリーは①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和があるが、今回は個人戦術を観察していくため、運動の局面構造、運動のリズム、運動の先取り、運動の正確さが重要であると考え、これらのカテゴリーを基にして実際の分析を行った。

第三章 ゲームにおける個人戦術の類型化

観察対象はアテネオリンピックのドイツ代表、ダニエル・ステファン選手である。観察対象決定の理由としてはプレイヤーとして多く関わっている左45のプレイヤーであるD・S選手の運動を中心として観察をしていく。これは、自分が理想としている個人戦術の持ち主であり、この観察から得たものを今後ハンドボールにかかわっていく際の手立てとしたいことも大きな理由の一つだと考える。そこで、アテネオリンピックのドイツ代表の試合の中から事例を抽出し、位置どりからの運動組み合わせにみられる先取りを中心とした視点で、①アウトの位置どりからのステップシュート、②インの位置どりからのミドルシュート、③アウトの位置どりからのカットイン、④アウトの位置どりでポジションチェンジからの展開の4つのプレーに類型化できた。これらの運動組み合わせの構造は、大きく分けると位置どり、走り込み、キャッチ、フェイント、ジャンプ、シュートとなっている。これらの運動組み合わせから明らかになったことは走り込みの際にキャッチ動作の先取りがなされていたり、キャッチの際にはシュート動作の先取りがなされていたりと多くの局面において局面融合が見られた。

<結論>

ゲームの中ではすべてのプレイヤーが個人戦術を発揮しており、ゲームを展開していくためには欠かせないものになっている。めまぐるしく変化するゲームのなかで、それぞれの個人技能をどのように活かすかは、訓練や経験によるものである。チーム間の実力が拮抗している場合、グループ戦術やチーム戦術の差が勝敗に影響するが、それらの戦術を構成しているのはプレイヤー一人一人の個人戦術であり、個人戦術はゲームを行うための前提となるものであろう。

個人戦術について研究してきたわけだが、今後の課題となるものとしては、今回観察できなかったプレーもあるということが挙げられる。また、個人の動きは集団の動きに影響し、逆に集団の動きも個人の動きに影響を及ぼすということがある。個人戦術からグループ戦術やチーム戦術といった集団戦術への展開、発展も課題としてあげられる。ハンドボールはチーム間でのボールゲームであるため、味方や相手など多くのプレイヤーがいる中で、よりよいプレーが求められ、個人戦術だけでは先が見えてしまう。そのため、個人戦術を活かした集団戦術の展開についての観察も視野に入れなくてはならないし、個人戦術を活かした1対1から集団戦術といった幅広い展開についての研究も必要になってくると考える。

(引用・参考文献省略/資料参照)